

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン=ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

〈神道〉はどう翻訳されているか

<発題 4>

古事記翻訳の試み

フランソワ・マセ

[illegible]

【井上】

時間がまいりましたので、午後の部を再開させていただきます。

午前中、非常に緻密な研究に基づいた興味深い発表がございました。これまで、昨日からずっと英語圏の研究者のお話をいただいたわけですが、今度は英語圏以外の方のお話ということでフランス語と韓国語ということで、また違った観点からの議論が展開されることを期待しております。

司会は、引き続いて中牧先生にお願いいたします。これからマセさんの発表ということになります。では、よろしくお願いいたします。

【司会（中牧）】

早速ですが、午後のセッションに入りたいと思います。お手元のレジュメにございますが、フランスの国立東洋言語文化研究所のフランソワ・マセ先生です。第5のテーマということで、「古事記翻訳の試み」とテーマでご報告をいただきます。それでは先生、よろしくをお願いいたします。

発題

フランソワ・マセ

自分の仕事についてお話しする機会は少ないです。普通は時間がないからという理由づけをしますが、実際は深く考えずに先駆者の仕事を真似ていることが多いと思います。國學院大學はこのシンポジウムに私を招待してくださり、自分の仕事を考える機会を与えてくださいました。まず第一に、井上教授をはじめとして國學院の方々にお礼を申し上げます。

『古事記』翻訳の試み」という題を出しましたが、昨日のマクナリー先生の発表を聞いて、やはり不可能だと思いました。「やるべき仕事」、という題のほうがよかったかもしれません。

日本古代神話を勉強しているので、『古事記』の仏訳をするのは当然だと単純に考えました。しかし、最初に具体的に訳を考えたとき、『古事記』のフランス語の訳は不可能だと思いました。といっても、1882年のチェンバレンの英訳が出版されて以来、オランダ語、イタリア語、韓国語の翻訳が次々に出版されました。チェンバレンの英訳だけを読めば、翻訳することが可能であるのに気がつきます。

私自身の仏訳の試みがまだできていないので批判が出るかもしれませんが、彼は『古事記』の様々な部分を細かく立派に訳しましたが、テキスト全体の内部論理をはっきり浮かび上がらせていないと思います。簡単な例を挙げると、チェンバレンは上巻で神名を訳しました。中巻から天皇の名を含めて人名を訳さないわけです。そうすると、神代の物語と

人間の物語の区別は原文よりはっきり表れています。さらに、『古事記』のような古いテキストの場合、直訳するだけでは不十分で注釈が必要であると思います。チェンバレンの場合もフィリップパイの場合も細かい注釈がついて、テキストの解明を助けていますが、『古事記』の統一性が見えない。小さいパラグラフ、言いかえれば、小さい挿話の並置に終わっています。また例を挙げると、フィリップパイは本牟智和気（ほむちわけ）と出雲の肥長比売（ひながひめ）の結婚という挿話の注釈で、このエピソードは『古事記』の主な筋と無関係だと指摘します。そうすると、この結婚と神代の山幸彦の結婚との関連を無視します。

それでも、彼らの訳と注釈を読むと、『古事記』の重要性がわかります。仏訳について言えば、残念ながら現在、私たちが読める仏語訳の『古事記』ははっきり言えば失敗です。無論、これで日本語や英語や韓国語ができないフランス人は、内容のあらすじがわかるようになりました。しかし、文章に全く味がない。しかも、注釈は注としての意味を全く果たしていません。『古事記』は、神々の出来事、ただの物語ではありません。特殊な言葉で書かれた、すぐれた文学的なテキストであるからです。その意味で、その失敗を見ると、『古事記』の翻訳が不可能だと思うのは当然です。

理由はいくつかあります。その1つは、変体漢語の原文と、現代フランス語の距離です。原文は漢文でもなく日本語でもなく、大変読みにくい。場合によっては、大変わかりにくい文章で書かれています。また、『古事記』の訓読の伝統は、できてすぐ断絶したと思われる。それで、今日私たちが読者にできることを希望すれば、読みにくい文章を易しいフランス語に直さなければなりません。

またもう1つの理由は、それは当然のことですけれども、7世紀の日本文化と21世紀のヨーロッパと相違があります。『古事記』の時代の日本では、神話は宗教的・政治的な役割を果たしていました。それに対して、現代社会では神話は昔話のような子供向けの娯楽文学にしか過ぎません。あるいは、数少ない専門家の研究の対象になります。つまり、かつてのような社会の中心的な役割も果たしていないのです。

最後に、多神教の社会と一神教であることも忘れた社会の世界観の相違があります。無論、西洋人はキリスト教の支配が頂点に達したときでも、古代ギリシャやローマの神々の存在を忘れませんでした。これらの神は既に取り戻すことはできない過去に属していました。また、近世になると宗教を批判をした思想家たちは、多神教より一神教のほうがより進歩的であると主張しました。Weberの言葉を借りて、呪術から解放された世界に属する現代人にとっては、魔法にかかったと見えるような世を描く神話を味わうことは特に難しいです。要するに、『古事記』の翻訳をしない理由はいろいろあります。

では、なぜ翻訳を試みるのかという問題が出てきます。まず1番に、社会的な答が出てきます。仏訳により、フランス人が日本の最高の古典が読めるようになるという理由です。例えば、ずっと以前からヘシオドスの神統記や、バビロニアのギルガメシュの叙事詩や、マヤのポポル・ブフの翻訳が出版されています。ごく最近では、法華経や『万葉集』の仏訳を読むことができます。その意味で、『古事記』のよい仏訳が必要であることは間違いありません。しかし、そのためには翻訳者は複雑な『古事記』の原文を読める研究者である

と同時に、優れた文学者でなければなりません。なぜかと言えば、古典の翻訳の目的はよいフランス語で文章を移し変えることにあるからです。それは、違う言葉からほかの言葉へというだけではなく、異なった概念や考え方、異なった文化の枠内の別の概念の言葉に置きかえなければなりません。遠い国の失われた世界を蘇らせるのは大変な責任です。それを試みるために、ある程度の例、計画の困難さに無自覚である必要があるでしょう。

最後に、もう1つ別の理由があります。それは、より自分本位のものです。イタリアの文学者の Primo Levi がよく説明したように、だれもがしていることですが、あるテキストを、その細部にわたって正確に理解するには母国語に翻訳するのが最も効果的な方法だと考えることです。言葉を1つずつ調べて、母国語で原文のそれに相当する表現を選ばなければなりません。当然であるかもしれませんが、あるテキストを暗記した人よりも、それを翻訳をした人は、そのテキストについて細かく緻密な知識を獲得します。翻訳することは、まず第1に自分のためです。

先に、『古事記』の世界とフランスの精神世界の距離を指摘しましたが、7世紀の日本文化と21世紀の日本という距離よりも広いと思います。余りにも特殊であるため、『古事記』の原文の難解さは、日本であっても文化がかけ離れたフランス人であっても、恐らく同じでしょう。というのは、原文が読める日本人は学者以外にほとんどいないからです。日本古典のシリーズの場合、『源氏物語』などと違って、原文だけではなく必ず訓読がついています。時々、原文のないこともあります。さらに、少なくとも小学館の『日本古典文学全集』が出版されてから現代語訳がついていることが多くなりました。文庫本の場合は、岩波文庫以外はほとんど現代語訳があります。それは、現代の日本人が古代日本語を簡単に読むことができなくなったという理由だけではありません。本居宣長の『古事記伝』以来、宣長の『古訓古事記』が流布されましたが、『古事記』は聖なる書にはなりません。それは、ヘブライ語の聖書やアラビア語のコーランのように宗教的な伝統に基づいて決められた読み方ではなかったからです。先に言ったように、太安万侶の伝えた読み方は、既に奈良時代ごろには失われていたと思われます。

そうすると、本当の『古事記』は原文であり、たとえ優れていたとしても、宣長が復元した『古訓古事記』ではありません。それで、いまでも『古事記』の訓読はある意味で翻訳であり、ある程度まで一種の解釈になるため、著作者により多くの相違があります。正しいテキストは、『古事記』の初めのことですが、例えば『古訓古事記』の「天地の初めのとき」ではなく、岩波古典文学体系の「天地初めて開けしとき」でもなく、小学館新全集による「天地初めてあらわれしとき」でもなく、また、岩波の思想体系による「天地初めて起こりしとき」でもありません。ただ、「天」、「地」、「初」、「発」、「之」、「時」という字です。この読み方だけの問題ではなく、「はじめ」、「あらわれし」、「起こりし」、「開けし」を使うと、異なった世界の初めの概念が表れます。

こう考えると、原文を前にして仏訳を試みようとする人たちは、現代日本人の立場とそれほど相違はないと思われます。ある意味で、外国人の翻訳者は日本人の学者より、むしろ自由かもしれませんが、言語学者ではない私自身はあまり自信がありません。歌謡の翻

訳以外、『古事記』の時代に話された言語の復元は、直接には一応ないということを考える危険もあります。『古事記』の翻訳者のジレンマは、漢文でもなく日本語でもない原文そのものを訳すのか。あるいは、安万侶が「語り」を書く言葉に移そうと試みた、いまはもう読めなくなっている原始の言葉を復元して翻訳しなければならないのか。その選択でしょう。

他文化の人にとって、原文のほうがいいと思います。と言っても、当然のことながら、漢字という表記の下に日本語の言葉があることを忘れてはなりません。また、言うまでもなく、大体の学者の著作・解釈を無視した原文からの翻訳もあり得ないのです。結局、やむを得ず宣長の、フィリップイの、神野志の『古事記』の訳の後で、自分自身の解釈による『古事記』を母国語に移すことになります。

それは言葉の問題だけではありません。先にも言ったように、『古事記』の翻訳をする場合、こういう概念の問題が表れます。『古事記』の最初の行から問題が出てきます。さっきの「天地初発の時」の次に、「高天原に成りませる神の名、天之御中主神」の「天之御中主神」という固有名詞の中に、「神」という言葉が出ています。その「神」は翻訳しなければならないかどうかという問題です。というのは、「神」の概念の問題と、「神」という言葉の使用の問題があります。

訳さなければならないとすると、今朝もその話が出ていましたが、*déité*、*divinité*、*dieu*、*entité* という言葉があります。そのうちのどれが最も適当でしょうか。無論、この場合、訳は解釈になります。よく考えて、結局フランス語の場合は *dieu* のほうがいいと思います。というのは、*entité* とか *divinité* とか、*déité* といっても自然に出ていません。特に文学の文章の中に、*deité* という抽象的な言葉になって自然に出ていません。*dieu* にすれば、日本の神々はギリシャ、ローマの神々に相応したものになります。

また、この問題は神名の問題と直接に関係しています。例を挙げると、また天照大神のことですけれども、チェンバレンは「Heaven shining august deity」と訳しました。フランス語の訳では、Shibata が「Grande.Auguste.kami :illuminant.du.Ciel」と訳しました。英語でもフランス語でもいい言葉はないです。この大神に対して、ある意味で本当に失礼だと思います。天照大神といえ、現代日本語でも自然であるのに、これらの訳はやはり不自然です。

ヨーロッパの言葉は日本語と違って、神の名前には、神という唯物的なカテゴリーの使用は普通はありません。ラテン語でも、ギリシャ語でも、フランス語でも *le dieu Jupiter* とか *la.déesse.Vénus* と言いません。ただ、ジュピター、ゼウスとはいえます。無論、*Jupiter.le.grand.dieu* とか *la.grande.déesse.Vénus* と言えますが、その場合 *le grand dieu* (大神) は形容詞になります。フィリップイは、神名を訳さないでこの困難は避けましたが、特に『古事記』の初めのところは、英語の本ではなく日本語の本を読んでいる感じがします。文学の場合、翻訳するのであれば、すべて翻訳しなければならないと思います。

その意味で、最近出版されたジャン＝ノエル・ロベール (Jean Noël Robert) の『法華経』は優れた仏訳の典型であると考えます。経典の仏訳にはありがちなサンスクリットの

言葉を、彼はすべてフランス語に翻訳しました。このような方法をとると日本語の音が消えてしまいます。だから、できれば日本語の言葉と訳と両方述べなければならぬと思います。そうすると、天照大神には、Amaterasu la radieuse とか、Amaterasu la grande déesse とかが可能になります。それは曖昧な解決策であるかもしれませんが、そうすると、日本語の音の響きと意味の両方がかぶっていることになります。しかし、天迹岐志國迹岐志天津日高日子番能迹迹芸命、あるいは、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命のような長い名前は、翻訳者、普通の読者にも絶望です。また、豊玉姫のような名前は問題になります。というのは、「玉」はただの宝石を意味するものではありません。昨日も話題になった「たま」、魂、力がある靈魂を連想させます。いまのところ他の解決策は挙げられませんが、チェンバレンの Augustness Luxuriant Jewel Princess の訳には満足していません。

須佐之男のような名前は、もっとも困難です。須佐が地名であるかどうかわからないからです。それでも、信じられないほど時間がかかる、こうした一つ一つの言葉のよい訳の選択は、まだ翻訳そのものの仕事ではありません。ただ、準備の段階です。さらに困難なのは、原文にふさわしいトーン、適当な文体を選択することです。『古事記』を読めば読むほど、『古事記』は飾り気の少ない言葉で統一性を持った、しかも複雑な構成に基づいて書かれた詩のようなところがあります。どのように、これを読みやすいフランス語に移すことができるという問題に答えなければなりません。

まず最初に活版印刷の配置について考えなければなりません。日本の写本や『古訓古事記』のように、章やパラグラフのないテキストにしなければならないと思います。テキストの呼吸は自然に神々や天皇の系譜などから出てきます。これにより、原文の流れの拍子を感じ取ることができます。現在、『古事記』の原文も訓読も読みにくいですが、原文から想像できる原始の言葉は堅い文体ではなく、興味深い物語を味わわせるため聞きやすい言葉で書かれていたはずで、味わいがあり、しかも、読みやすい文章を書くのは普通の人には大分時間がかかります。むしろ古風な表現を避けて、現代フランス語で書かねばなりません。というのは、フランス語のみの場合を考えても、フランス語の最古のテキストは9世紀のものですから。現代フランス人には、その最初のフランス語が書かれた時代と同じ時代のフランス語は理解不可能です。だから、やはり現代フランス語にしなければならない。

最後に、複雑な構成の問題に少し触れておきたいと思います。これは私個人の解釈ですが、『古事記』は構造のないバラバラの物語集として書かれたものではありません。決まった形式の詩、歌のようにつくられたのだと思います。というのは、ソネットや和歌のように、『古事記』全体のテキストのリズムは書かれた話と同じように意味を与えると思います。翻訳を超えた今後の問題は、どのように構成を註や解釈以外の形で翻訳の中に表現させるか。だれもしているように、詩や歌の翻訳は何よりも難しいです。だから、『古事記』はいまでも考えていますが、可能か不可能かちょっとわかりません。以上です。(拍手)

質疑応答

【司会（中牧）】どうもありがとうございました。『古事記』をフランス語に翻訳する。そういう試みを考えたときに絶望的な境地に陥って、14年かければ何とかなるというような問題でもなさそうですが。

どうぞ皆さん、今朝の言語学的な視点を取り入れた翻訳の問題。現在のご報告は、むしろ文学的な味わいを現代フランス人に提供しようという、そういう試みの中でマセ先生がいろいろ考えたことについてご報告をいただきましたが、どうぞたくさんの人にピンポイントでご質問をしていただければと思います。お名前とご所属をおっしゃっていただいて、よろしくお願いします。どなたでも結構ですが、どなたか口火を切ってください。はい、どうぞ。

【松井】大阪国際大学の松井と申します。1つ、ちょっとお聞きしたいのは、フランス語訳がだめだということなのかもしれませんが、どれぐらいフランス語訳の『古事記』があるのか。例えば、Shibata というお名前が出ましたが、これはたしか 1969 年に出ておりまして、たしか 90 年に再版されたと思います。

【マセ】そうです。全く同じです。

【松井】全く同じものが再版されているということは、いまのお話ではあまり人気がないはずなのになぜ……。それは何部ぐらい売れているのか、そういうことは私は存じ上げませんので、需要があるのかどうかということもご紹介いただければありがたいと思います。もう 1 つの問題で質問させていただきたいのは、フィリップの英訳を読んでいると、日本語を読んでいるようだという大変印象深い指摘があったのですが、先ほどもベンテリ先生のときにちょっと質問し忘れましたが、原語を残したほうが読みやすいという言い方をなさっていたんですね。英語というのはローマ字表記です、神名・人名を翻訳、チェンバレンの例を挙げて、翻訳すると読みにくい。

私は、むしろ逆だと思っていたんです。私たちが外国語の本を読むときはやたらとカタカナの固有名詞が出てくると嫌になってしまうという、むしろそれを意味を訳して書いてくれたほうが読みやすいのかなと思って反対かなと思っていたのですが。いまの先生だと、長い名前だからわかりにくいと聞きましたが、人名・神名などは翻訳の際にどのようにお考えかと、ベンテリ先生にもお答えいただくとありがたいのですが……。

【マセ】最初は Shibata の訳の問題ですが、ほかの翻訳がないから再版されました。再版の前にその出版社から話がありまして、「どう思いますか」と聞かれました。「そのままでだめ」と言ったのに、再版しました。だから、本当に残念だと思います。

【松井】売れ行きはどうですか。

【マセ】そんなに、これでお金は儲からないと思いますよ。学生は買いますね。だから、困ります。

2番目の質問は人名ですが、やはりベンテリーと全然違います。フィリップイの翻訳の場合は、もちろんフィリップイの翻訳は本当に立派な翻訳です。しかし、時々、『古事記』の初めのところとか、例えば、伊邪那岐が火の神を殺すとき、また神の名前は大分出ています。そのときは、やはり日本語だけが書かれていて英語は全然見られない。もちろん、注がありましたから、その人名の意味はわかる。でも、普通の読者は最初は本文を読みます。それでやはり、逆に、ある意味でそれは訳ではないと思います。特に Shibata の訳を読めば、それは元の名前は全然出てこない。だから、伊邪那岐のこととか須佐之男のこと、全部訳があります。変な訳ですが、フランス語の人にはどんな神がいるかということとはわかりません。それも困ります。だから、例えば Amaterasu.la.radieuse とか、日本語とフランス語を両方しなければならないと思いますが、やはり長い名前になるとこれはちょっと難しいです。でも、番能迹迹芸命の場合は普通の日本人も最後だけです。番能迹迹芸命。だから、それは選択の問題ですが、できれば読みやすい意味と、もとの名前を訳の本文に書かねばならないと思います。それは特に文学の翻訳の場合は、それはそうしなければならない。

【司会】ベンテリー先生にも、ちょっとコメントをいただければありがたいのですが。

【ベンテリー】自分の訳でいろいろ思い出すところがありますが、例えば、伊邪那美が火傷をして亡くなったときにいろいろな神々が出て来ました。私は、その神々の名前を英訳したのをいま思い出しましたが、1回しか出てこない神々も多い。例えば、須佐之男命とか迹迹芸命は名前が何回も出てくるのでローマ字にして、1回しか出てこない場合は名前ではなくて名称としての漢字はやはり英訳しています。

【司会】ありがとうございます。よろしいでしょうか。

【松井】はい、ありがとうございます。

【司会】はい。

【桜井】皇學館大學の桜井です。2つの質問です。1つは、『古事記』の中に「何々の神」というふうに表現されるものと、もう1つは、軻遇突智というような、「ミ」とか「チ」というふうな存在として表れるものがございますね。ああいう場合に、神観念という問題に関連して何か異なったというのでしょうか、訳しかえられているのかどうかという問題、これを1つお聞きしたいと思います。

それから、先ほどベンテリー先生のところでも「綿津見（わたつみ）」というのと、海の神の「海神（わたつみ）」という場合は、ocean と sea とは違うのかという疑問も持ちました。こういう意味での『古事記』や『日本書紀』の中に、なお、「神」というふうにならないけれども、そうした霊的な存在を示すような場合の表現、翻訳の問題を何かお教えいただければと思います。

それから、いまのご発言の中で『古事記』の場合、一番初めに天地初発の部分が出ます。あの部分を先生は実際には、「天地が初めて開きしとき」、あるいは「起こりしときに」と、どういうふうにとらえられているのか、ちょっと教えていただければと思います。

【マセ】一番簡単なのは、やはり本居宣長の「天地のはじめの時」が一番危険のない訳に

なります。というのは、「開きし」とか「起こりし」とか、やはり、その言葉を訳すと概念、解釈になりますので、ちょっとそれを避けたいと思います。

神以外の、「ミ」とか「チ」の場合、やはり軋遇突智と、時々、「チ」があっても、その後、「……の神」という神名もありますが、できれば、その「何とかの神」の場合の「神」は訳さない。そのほかの表現から、「ミ」や「チ」があれば、dieu とか、似ている表現を使って翻訳できると思います。それでよろしいでしょうか。

【桜井】ありがとうございました。それでは、最初のほうにお答えしていただきました天地初発。確かに、日本での研究者の解釈も異なりますが、宣長がそのこの読みに非常にこだわっているのは、もう1ヵ所「くらげなすただよへる時に」のように、この『古事記』自体の冒頭の中に、始まりというのが2つの表れ方をしているということ。そうすると、先生が『古事記』全体のリズムや流れの中で翻訳をしていくということ考えると、そこら辺りを曖昧にせずに明確な翻訳というものがなくなってこないかなという心配をしているのですが、いかがでしょうか。

【マセ】それは、やはりそうです。曖昧なところは『古事記』もあちこちあります。といっても、統一性もあります。もちろん、それは訳になると両方表すのはとても難しいです。それで時間がかかります。

【司会】それではほかの方、いかがでしょうか。どうぞ遠慮なく、時間がたっぷりございますので……。

【青木】國學院の青木です。マセ先生がお読みになった中で、日本の研究書といえますかテキストの中で、どれが一番文学的にすばらしいものかどうか、ぜひそれをお聞きしたくて……。

【マセ】それは、難しい問題ですね(笑)。いつ読んだかということですね。それから、最近出た小学館新全集の神野志ともう1人の方の訳を最近読みましたが、印象は強かったです。でも、もう一度、前に出版された本を読まなければならない。

【青木】宣長についてはいかがお考えですか。『古事記伝』でも、『古訓古事記』でも。

【マセ】それは割と早く読みましたが、それもすばらしいと思う。確かに、いまでもすばらしいと思います。

【青木】ありがとうございました。

【司会】答えにくい質問でした。

【マセ】宣長の場合は答えやすいと思います。というのは、宣長の場合はやはり文体、一体性はよくわかります。最初から終わりまで同じ文体です。これはすばらしい。

【司会】ほかにはいかがでしょうか。はい、どうぞ。

【山中】筑波大学の山中ですが、神道の専門家ではないのでちょっと違った角度からご質問したいと思います。ちょっと答えにくいかもしれませんが、昨日からご発表を伺っていて、アメリカの学者の先生がずっと続いて、対象は本居、あるいは記紀と違うわけですが、アメリカの研究スタイル、翻訳のスタイル、あるいは問題意識。それから、先生のようにフランス、あるいはヨーロッパの研究のスタイル、あるいは問題関心といえますか態度と

いいですか、そういうものに何か違いはあるのでしょうか。個々にそれぞれやっているのだというお話であればもちろん結構ですが、何かそういう違いみたいなものがあれば、恐らく、今回のシンポジウムの企画意図の1つは、アメリカの研究者だけではなくて違う、次に韓国の方のお話も興味深く期待していますが。そういう国の差といいですか、そういう何か研究の態度や解釈や問題意識の中に出てくるのかどうか、もしお聞かせ願えればと思います。

【マセ】本当に答えにくいです。というのはアメリカと違って、ヨーロッパは1つの国ではないです。フランスの場合は、研究者の数は少ないです。アメリカの場合は今日は5人ですし、古代を専攻したアメリカ人は割と多いです。フランスになると2〜3人になります。だから、2〜3人でフランス風というところちょっと言いにくいです。それから、個人差もありますし、アメリカの研究者の中にも個人差もありますし。それで、アメリカ風の研究とかヨーロッパ風とか、フランス風の研究とはちょっと言えないと思います。

そうすると、例えば、今朝の言語学から翻訳するのと、神話学とか文学からの訳の試みは、アメリカとフランスの違いではなくて、やはり専門の違いがあります。ある意味で、研究だったら世界中大体同じでまじめな研究だと思います。これは、国際化のいい面です。

【司会】ただ、今朝の発表といまの発表は明らかにトーンが違って、大分異なっていたということはあります。それはやはり個々の研究者の個性というものもあるし、自分の専門の立場がちょっと違うということもあるでしょうし、なかなか一概には……。

【マセ】もう1つ、それは『日本書紀』と『古事記』の違いです。ある意味で、別世界ですね。

【司会】今朝は、『古事記』というのは一人の人が書いたのだ。poet というか、詩人が書いたようなトーンですね。

【マセ】そう思います。

【司会】ほかにいかがでしょうか。

【井上】國學院大學の井上です。正確に聞いたかどうか、もし間違っていたら言っていたきたいのですが。天之御中主神（あめのみなかなぬしのかみ）というところのご説明で、「神」という言葉に天照という性格、属性がつきます。日本の神々にはそういうものがいっぱいありますが、フランスの場合 dieu は、形容詞的なものが見つからないということで難しいということをおっしゃったように聞いたのですが……。

【マセ】説明が足りなかったかもしれません。ただ、日本語の場合は、川の場合は川の名前と川、セーヌ川と言いますね。フランス語では、セーヌだけとなります。だから、神の場合は同じですね。天照大神、大は別の問題ですが、天之御中主神は「神」をつけなければなりません。でも、翻訳すれば最後の「神」は必要ないと思います。でも、天照大神の場合は大に訳さなければならない問題です。それが形容詞になったら何とかできると思います。

【井上】なぜこういう質問をしたかと申しますと、それはフランス語の問題なのか、dieu という、「神」という言葉を使ったときの問題としておっしゃったのか。例えば神への形容

ということだと、イスラムの場合は要するに、神の属性をつけるというがあるので、例えば、フランス語にやるときには同じような問題が起こるとか。それはどう処理するのかということですよ。

【マセ】特に現代フランス語の場合は、その問題は全然ないです。例えば、『古事記』の最初の文章ですが、「高天原の中に成りませる神の名は」の場合は、「成りませる神の名は」そこで音訳しなければならない。だから、「le.nom.du.dieu.who.apparut」になります。でも、その後、「天之御中主神の最後の「神」は訳さなくてもいいと思います。

【司会】いまのことに関連して何かございませんか。はい。

【西條】専修大学の西條と申します。午前中のお話は聞いていないので関連はわかりませんが、神観念という言葉は我々日本人も案外わからない面があります。いま幾つか、天照大神のような神様もいれば、ククノチと呼ばれるような神様もいる。そういうのは、我々は神観念ということで何かわかったようなわからないような感じで非常に曖昧にとらえている面があるのですが。もっとはっきりさせれば、日本人が持っているような神観念というものが何となくあって、そういう体系の中でとらえていることもあるのではないかと思います。

そういったものをフランス語に翻訳する場合に、フランス語に翻訳するとフランス語の観念でしょうから。そういった、フランスの神観念とか、そういったこととの関係はどうなのでしょう。それはなかなか、フランスでもそういった神観念の神名観というのは様々あるということでしょうか。、 、

【マセ】そうですね。その中身の訳に関係があります。というのは、*déité* とか、*divinité* とか、*entité* を翻訳すれば、それはある意味で決まった解釈になります。でも、フランス語だけの場合は、*dieu* を使ったら、それはある意味で曖昧な言葉になりました。

というのは、もちろんキリストの神がありますが、昔のローマ時代とかギリシャ時代の場合は神々は現代フランス語で *dieu* といいます。普通は、ほかの宗教の神様が普通の訳は *dieu* になります。もちろん、それはローマ時代の *dieu* と全く同じことでみんな知っています。ただ、*dieu* というと、その曖昧さは残っています。だから、それは便利です。

【西條】翻訳に一つ期待するのは、私は一応文学として『古事記』などを勉強しているのですが、わからないところもたくさんありまして、先ほどのお話で申しますと、フランソワ・マセさんはおよそ2つの点で困難だということをご指摘されたと思うのですが、1つは原文の読み方。それと、もう1つはフランス語への置きかえのときの難しさというようにお話があったかと思いますが。原文の読み方というのは、多分解決しようがない問題で、何か決まった読み方が将来期待できるということはほとんどないと思います。日本でも、結局はばらばらな解釈が行われているような状況だと思います。

結局、日本での研究にもある程度限界を感じているわけです。多分、どこかで限界があるんだと思います。『古事記』とは何か、『古事記』をどう読むかという問題に関すると、そういうときに日本の研究者が限界と感ずるところを全く外側から見たときに、何か解決できる面があるのではないかというような期待があります。

ですから、原文の解釈は普遍的な解釈ということではなくて、それぞれの立場で考えて読み込まれていって、それで原文の解釈をきちんとされた上で、それに基づいて翻訳をされるということだと思うのです。そのときに、できれば日本的な読み方の限界を超えろというような意識を持ってやっていただいたら大変ありがたいと思います。これは、そういうようなことをやっている現場の人間からの非常に情けない希望です。

【マセ】ありがとうございます。

【司会】ほかにいかがでしょうか。朝から続いているような問題がたくさんございますので。はい。

【ウェイマイヤー】フロリダ大学のウェイマイヤーです。例えば、倭建が白い動物に会います。そのときに言挙げがあります。フィリップパイの翻訳では英語に翻訳して、注をつけましたが、マセ先生の場合はどうなさいましたか。

【マセ】そこはまだです。ここはまだしていません。やはり考えなければならないですね。すみません。

【司会】ベンテリー先生はどうされましたか。

【ベンテリー】覚えていません。

【司会】それでは、ほかの質問はありますか。はい、どうぞ。

【青木】先ほど漠然とした質問でしたので、もうちょっと具体的な質問です。マセ先生、高天原（たかまのはら）というふうにお読みになったのですが、あれはやはり訓注を意識してお読みになったのですか。

【マセ】ええ。

【青木】そうしますと、高天原（たかまのはら）をもしフランス語にお直しになるとときには、どういうふうなイメージで。

【マセ】翻訳は、「la.Haute.plaine.céleste」になりますね。「天にある平原」という訳になります。

【青木】そのイメージは、例えば、天という表現は「アメ」という、日本語でいう、それとやはり違うものという概念ですか。

【マセ】だから、この場合は「天」の名詞ではなくて形容詞、céleste になりますから、もっと軽いです。だから、Ciel のように天地とかはちょっと避けますね。形容詞の使い方は便利です。

【青木】わかりました。どうもありがとうございました。

【司会】はい、どうぞ。

【城崎】國學院大學のCOE研究員の城崎と申します。午前中のお話を伺っていなかったで突然の質問で申し訳ないです。以前、『古事記』を日本人がドイツ語訳したオペラを拝見したことがあります。それはオペラですから上演されるということが基本にあるわけで、結局、『古事記』の世界観みたいなものをどう伝えていくか。オペラという形態を通してどう伝えていくかに焦点があって、世界観というようなもの、日本人がもちろんドイツ語訳していますので、非常にその世界観をわかりやすく説明してあります。

マセ先生は、フランス語訳をされるときに『古事記』、いわゆる文芸性の問題ですが、『古事記』の中にある世界観みたいなものと、これまでマセ先生がお持ちであった「神」に対する観念、「神」の世界観みたいなものと、どういうふうにお考えになりながら翻訳されていくのかというところをちょっとお伺いしたいと思います。

【マセ】ももとは、世界観を勉強するために『古事記』を読みました。『古事記』を分析して。それはだいぶ昔のことです。20年前です。それは日本語で出版しましたが、フランス語ではまだしていません。分析をして出版するために翻訳をしなければならない。だから、翻訳がないとその分析は役に立たないと思います。やはり、最初から世界観のことを考えます。その世界観の分析と文学とは深い関係があります。最後に言いたかったことをはっきり言いませんでしたが、その表現（スタイル）と内容は結びついています。それから、いい訳ができれば内容も簡単になります。

【城崎】ありがとうございました。

【司会】どうぞ。

【中井】上智大学の中井です。先ほどマセ先生のフランス語を通して文学作品に取り組むこと、非常に同情的な気持ちで聞きましたが。やはり名前の問題はどうしても、翻訳することも元の文字の形にしても、やはり解決できる問題ではないと思います。例えば、天照大神の場合は、その名前はかなり観念的な名前です。そして、それを結局翻訳することはその意味では割と簡単です。例えば、迹迹芸命の場合はそれをどういうふうに示すか。結局どちらがフランス語として自然になるか。そしてもう1つの問題は、例えば、大国主の場合は名前を変える。例えば、フランス語ではわかりませんが、英語では「Master of the Great land」、それは結局、翻訳することによって2つの翻訳が出てくるから、かえって日本語がわからない読者にとってはわかりづらいですね。ですから、観念的ではない邇邇芸命か大国主みたいな問題はどういうふうに……。

【マセ】問題は、神名の形は違います。それは本当にわかるかどうかは別の問題ですが、意味がすぐわかる神名とほかの神名の問題です。やはり、大国主の例はとても難しいですが、大国主そのものはそんなに難しくありません。しかし、大国主のほかの名前は苦労しなければならない。

しかし、できない場合は日本語をそのままにしなければならない。それはやむを得ないと思います。でも、その世界観の問題ですが、神名に意味があったらそれを翻訳しなければならないと思います。

【中井】迹迹芸命はどういうふうに……。

【マセ】それも不思議ですね。長いから最後だけとりませんが、最後はニニギになりましたが、本当は、ホノニギのほうがいいと思います。その「ホ」は大事なことです。その場合は、解釈の問題になります。その「ホ」は、稲穂とか五穀の穂の可能性は強いです。それは、その後の「迹迹芸」という言葉の意味は「豊か」ととりませんが、その面で翻訳しなければならないと思います。

でも、最初に言ったようにやはりその番能迹迹芸命の番能迹迹芸命という日本語をそ

のまま同じ。例えば、aux.épis.abondants とか、フランス語の迹迹芸の訳をつけて合わせてしなければならないと思います。

【司会】よろしいですか。ほかにいかがでしょう。はい、どうぞ。

【平藤喜久子】國學院大學の平藤です。1928年に松本信広がフランスで、『Essai sur la mythologie japonaise』というものを出版していますが、その最初のほうに、日本神話の要約を書いています。その中では、天照大神（あまてらすおおみかみ）だけは la grand déesse Amaterasu というふうに表記して、そのほかの神はすべて、le dieu Izanagi とか、「Le dieu Susanowo」というふうに区別してフランス語訳をしています。

先生がさっき、「天之御中主神」の場合、「天之御中主（あめのみなかぬし）」というふうにする。それで、天照の場合はやはり変えるというのは、同じ発想といえますか、Le dieu Susanowo というふうにするのと、la grande désse Amaterasu というふうにするのと、やはり同じ意味になるのでしょうか。

【マセ】やはり天照大神の場合は、Amaterasu といえば、意味が出ていません。だから、la.radieuse というのは「照らす」という言葉を訳さなければならないと思います。大神より、やはり天照のほうが重要だと思います。だから、須佐之男の場合はやはり須佐之男だけ、「le dieu」という言葉は要らないと思います。

【平藤】先生の翻訳の中では、須佐之男は Susanoo で、天照は Amaterasu。

【マセ】そうです。

【平藤】「la grande déesse」のように、大御神のところは……。

【マセ】問題は、その長さの問題ですね。というのは、全部を翻訳すればとても長くなります。ただ、それも読みにくくなりますので避けたいと思います。これは1つの問題、フランス語に翻訳すれば、その繰り返しの問題です。

日本語の場合、特に『古事記』の場合は繰り返しがとても多いです。フランス語の場合は、その繰り返しはとても辛いです。普通の、いわゆるいいフランス語の場合はその繰り返しを避けます。もちろん、詩の場合は繰り返しができます。だから、最後に『古事記』を詩として扱ったら、繰り返ししてもいいですが。とても多くなると、やはり辛くなります。

だから、天照大神の場合は、場合によって「Amaterasu la grande déesse」か、「Amaterasu la.radieuse」か、それで、その繰り返しを避けます。それで、天照（あまてらす）の名前を全部翻訳できます。まあ、ちょっとトリックみたいですがそれでも。

【司会】いまの天照は、女性形でよろしいのか男性形を使うのかという問題もありますが。先ほど、「Amaterasu grand dieu」というふうに、不定冠詞は入れなかったですか。

【マセ】いやいや。それも性格の問題かと思います。『古事記』の神話を分析すれば、やはり女性形。というのは、天照（あまてらす）は女神だと思います。

【司会】また、そういう難しい問題もありますけれども。ほかにありますか。あと5分少々ございます。はい、どうぞ。

【桜井】桜井ですが、具体例を出してお尋ねしたほうがわかりやすいと思いますので。先

ほど、倭建に関して質問がありましたが、たしか『古事記』の中では、倭建が国を臨んで3回嘆いたという表現が出てきます。これははっきりと、3度ですから数回になるのでしょうが、宣長はそこを、三度（みたび）と読まずに、非常に思い入れを入れた解釈をしたと思うんですね。それは回数よりも、その嘆き方が非常に重要だったという解釈だったと思います。

こういう場合、翻訳の場合は文学的に、ひょっとしたら宣長の場合は倭建をグーッと取り上げてきますから、そこに日本的な思いを解釈していくことがあります。単に「三度」と訳すよりは、もう少しそこに、なぜ三度というものを注で済ませるか、本文の中でうまく訳し切れるようなものがあれば、より意味としては伝わるのかなという部分もある。その辺りで、これからの翻訳という点でお考えがありましたらお願いいたします。

【マセ】その場合は、宣長に従います。

【司会】ほかにいかがでしょうか。はい、じゃあもう一度。

【西條】根之堅洲国というものもありますが、これをフランス語に翻訳されるときにどのようなご苦勞をされたのでしょうか。

【マセ】そうですね。「根」という問題も、「堅洲国（かたすくに）」も2つの問題があります。ただ、「根」の場合はしょうがないですね。確かに、翻訳できないと思います。というのは、チェンバレンは黄泉の場合はHadesですが、「根」の場合は忘れちゃったけれども。

やはり、黄泉の国の場合も「黄泉の国」そのままにしなければならない。国は訳せますが、「黄泉」とか「根」の場合は訳されないと思います。

【西條】「堅洲国」というのも、これは日本語としての固有名詞ということで、そのまま…。

【マセ】そうですね、はい。

【西條】これをフランス語に訳す場合はそういうふうに、固有名詞はそのまま、人名や地名はそのまま。先ほどは、できるだけ意味を含めてと……。

【マセ】そうですね。できればですね。解釈は、解釈できればもちろん翻訳できます。でも、いろいろな解釈があればそれは危ないから、やはりそのままのほうがいいと思います。できるだけ翻訳しなければならない。でも、時々できない場合は無理にしないほうがいいと思います。

【西條】安心しました。その辺のところが翻訳の一番の難しいところで、僕らは日本の古い言葉を日本語として読んで、現代語訳なども「根之堅洲国」ということで現代語訳などでも使っていると思いますが、意味的には、ではどういう意味かというお手上げな面が結構ありましてわからないところもある。そういう非常に曖昧なまま『古事記』を読んでいるという部分がありまして、そういったところも同じ問題を共有していますね。まあ、わかりました。どうもありがとうございました。

【司会】そろそろ時間も迫ってまいりましたが、司会者の特権で最後に一言、ちょっと突拍子もない質問をさせていただきたいと思います。フランスの神話学の伝統を振り返ってみると、ジョルジュ・デュメジルとか、あるいは、レヴィ・ストロース、彼らも日本神話

を読んで、あるいは、それに関するものも書いたりしているわけですが……。

【マセ】デュメジルはやってないです。

【司会】デュメジルは全然やっていないですか。

【マセ】やっていないです。興味がありましたけれども、書いていない。

【司会】もし、マセさんの翻訳が出ていたら、彼らはこんな研究ができただろうという。こういうすばらしい成果があっただろうにとか、こんな解釈はしなかっただろうにとか。何か、そういうようなことがもしあれば教えていただきたいと思います。

【マセ】デュメジルはもう亡くなりましたが、レヴィ・ストロースさんはまだ元気だと思っています。まあ、話は1回だけしたことがあります。日本に興味がありまして、日本神話にも興味がありました。

でも、不思議なのは、日本神話に彼の構造的分析をすると、彼はちょっとおかしいと。書かれた神話に対して構造的な分析をするのはだめですと言いました。けれども、彼自身ギリシャ神話の分析をしました。だから、ちょっと変だと思っています。でも、その翻訳をできればレヴィ・ストロースにも会いたいと思います。

【司会】それでは時間がまいりましたので、これでマセ先生のセッションは終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

